
24 散 村

アイルランドを旅すると、緑が目にしみる。牧草地のやわらかな緑と、それを取り囲む生け垣の深い緑の調和が、ほんとうに美しい。イギリスでも同じような風景はあるのだが、なぜかアイルランドのほうが、緑が美しいような気がする。

そのアイルランドの各地に、リング・フォートと呼ばれる小さな砦がみられる。1500年ほど前からつくられた、土塁をめぐらせた屋敷だ。大きさは、直径30メートル前後。全土で数千基をはるかに凌ぐ数があるというから、かなりのものだ。地図を見てみると、この屋敷地が、1、2キロの均等な間隔で分布しているのに驚かされる。日本のように村を形成せずに、住居が完全に散在しているのだ。土塁こそないが、分布のパターンは現代の農村でも同じである。

この、1、2キロの間隔というのは、ひとつの家族を支えることのできる農地の広さを反映している。日本だと、1町の田畑があれば、税を払っても、ひとつの家族が食べていけるといわれてきた。1町はおよそ100メートル四方だから、アイルランドの場合は、100倍以上の土地が必要だということになる。いったい何がそんなに違うのだろうか。

昔、ヨーロッパの農業について、三圃制というのを習ったことがある。農地を三つに分け、1年ごとにひとつを休ませ、牧草地にして家畜の排泄物で肥料を施すというものだ。だから、少しは広い土地が必要なのはわかる。だが、あまりにも差が大きすぎる。

差が大きくなる第1の理由は、一般に耕作土が極端に薄いことだ。10センチ掘れば岩盤にあたるような畑で作物をつくっている。日本のように灌漑で水に混じって土が運ばれてくることはなく、逆に土が流れ出す一方で、保水力も保肥力も、かなり低い。

第2の理由は、今も述べたように、肥料を施すために羊などを放つ必要があることだ。

第3の理由としては、土地を耕すのに人力では不可能な面積になるので、牛などの畜力の助けを借りることになるが、その牛を飼うのに、また広い面積が必要になる。

そして、最後の理由は、乳牛や肉牛の飼育だ。穀物の生産は、収穫量の変動が大きいので、他の種類の食料源を確保しなければいけない。それに最適なのは牛の乳と肉で、その飼育にも広い面積の土地が必要になる。もし牛だけに頼って生活をするならば、少なくとも1キロ四方の土地がなければならないという。

このように、いろいろな条件が相乗的に重なって、必要な土地の面積が、これほどまでに大きく違ってくるのだ。ここではアイルランドの例を取り上げたが、ヨーロッパはどこでも似たようなもの。こうした形の農業だと、村を形成するよりも、散在していたほうが効率的になる。

もちろん、だからといって、ヨーロッパの国々の人口が少ないというわけではない。その分を、徹底的に森林を切り開くことによって埋め合わせた。畑に適さない土地は牧草地にされ、大部分の土地が開発されてしまった。そのため、イギリスの森林面積は、日本などと比べると、極端に少なく、アイルランドの美しい緑も、森林によるものではない。

日本の農業が、職人ワザのようなところがあるのに対して、イギリスなどの農業は、経営という言葉がふさわしい。今日ではほとんどの農家は、1キロ四方以上の土地をもっており、小さいながらも一国一城の主だ。近所の人たちとのつき合いは、社交以上のものは求められず、これがイギリスの人たちの自立的性格の理由となっている。そして、夕方になると、車を走らせて、パブでの話に花を咲かせるのだ。イギリスの人たちがこよなく愛するカントリーの生活の背景には、日本とはまったく違った農業があるといえるだろう。